

文房四宝

資料提供

(株)ならや本舗

【第十三回】「墨と他の用具の選び方」

◇はじめに

書道において欠かすことのできない文房四宝(筆・墨・硯・紙など)について、基本的な知識を中心に連載しています。第八回(令和六年十一月号)では、墨を磨るときの基礎知識および、さまざまな種類の墨を解説しました。今回は、墨と他の用具の選び方について述べます。

◆各用具の選び方

墨は単体で使用できません。磨るためには硯が、表現には紙と筆が必要です。今回は作品制作の参考例として、「墨の美しさ」を引き出すための各用具の選び方について解説します。

■墨と硯

墨が本来持っている能力を発揮させるためには、「細かい鋒銚(ほうしょう) (硯面の凹凸) がある硯で磨ること」が肝要です。鋒銚が細かい硯を使用すると、どんな墨でもある程度は粒子が細かく、伸びのよい磨墨液になり、墨の力を最大限に引き出してくれます。主な硯としては、唐硯では

「端溪硯」、「歙州硯」や「澄泥硯」など、和硯では「雄勝硯」、「雨畑硯」や「赤間硯」などが有名ですが、現在、いずれの硯も良質なものは数も少なく、高価で手に入りづらくなっています(ごくまれに安価で良質な硯もありますが……)。

また、見た目は美しくきれいでも「磨れない」硯もあります。天然石の硯は鋒銚が硯面の全体に入っていないことがあり、磨墨に時間がかかります。ただ、なかなか墨液ができないからといって、力を込め早く磨ったとしても、発色や伸びが悪く、粘り気のある磨墨液に仕上がってしまいます。正しい磨り方と硯の選び方を理解していないと、「墨を磨る」時間がかかる「面

倒くさい」という悪循環が生まれてしまいます。

この悪循環により、会長(筆者の実父)は固形墨が敬遠されて製墨業が廃れてしまうことを危惧していました。そこで「良質な硯を多くの人の手に取ってもらいたい」と考え、三十年以上前から良硯といわれる硯の鋒銚を研究しました。そして平成七年に早く細かく磨れるセラミック製の、平成十四年にダイヤモンドを使用した硯(写真1・2)の製造と販売を始めました。

しかし、従来のセラミック製の硯や合成硯などの人工硯は品質が悪く、今回開発したセラミック硯も販売当初はよいイメージを持たれていませんでした。ただ、新たに開発したセラミック硯は学童用のプラスチック製のような硯と異なり、硯面全体に人工鉱物の鋒銚が出るように工夫された硯です。天然の硯ほどの鋭さはありませんが、従来よりも容易に良質な磨墨液を作れるようになりました。液体墨の場合は手軽に同じ黒さを出せるよさがありますが、「墨を磨る」ことによって固形墨特有の墨色の変化の楽しさがあります。墨磨りの楽しさを多くの人に知ってもらいたいと私たちは考えています。

硯は石質や見た目だけでは良しあしが判断しづらい書道具なので、選ぶ時には用品店に行つて硯を触ったり、水をつけて指で擦ったりさせてもらい、たくさんの硯に触れて感覚を覚える

ことが大切です。ただ、大変高額な硯もあるため手に取って硯を確かめたいときは、必ず店員さんに確認してから触るようにしてください。

また、ハンドクリームなどを塗っている場合は油分で墨をはじいてしまうため、事前に手を洗ってから触れるようにしましょう。

■墨と紙

墨色の表現には紙が必要です。紙にも原料の

配合で墨の食い込みが多い、または少ない紙や滲み止めの加工を施した紙などさまざまな種類があります。食い込みとは「紙の繊維の中に墨が入っていく」ことの表現で、墨量が紙繊維の吸収する許容量を超えると「滲み」になります。紙の材質により墨の滲みやすが異なるため、特徴をまとめます。

・紙が厚いと墨量の許容量が増えるため、滲みにくい。薄いと滲みやすい。

・紙の繊維が長いと食い込みが少なくなり、滲みにくい。短いと滲みやすい。

・墨の濃度が高いと水分量が少なく食い込みなため、滲みにくい。濃度が低いと水分量が増えて滲みやすい。

その他にも、書くときの天候、湿度や空調の使用などによっても滲み方が変化するので注意が必要です。加工紙に書いた墨の滲み具合を、写真で次頁に掲載しますのでご参照ください。



【写真1】最初に開発した三層セラミック硯（文殊硯）

※端溪、歙州、澄泥硯の鋒銚に近い、三種類のセラミックを素材としている（現在は廃盤となっています）。



【写真2】ダイヤモンド硯（光明硯）

※硯面に工業用のダイヤモンドを使用している。また、ひし形の溝に水が溜まり、池に水が流れずに磨れるため、三層セラミック硯より早く、細かく磨ることができます。

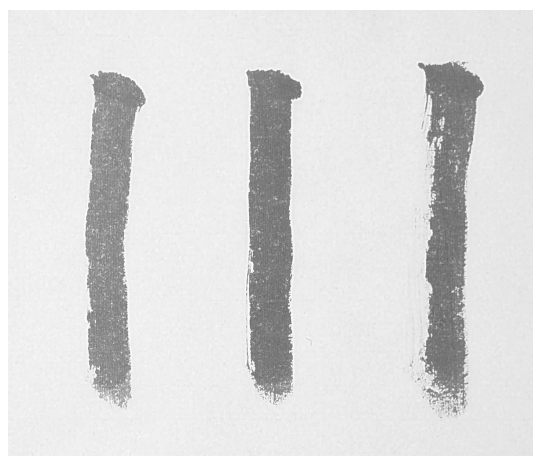
【参考】加工紙の滲み具合について

※三本の線は、「右：磨墨液（原液）、中：磨墨液に水を足したものの、左：さらに水を足したもの」で、それぞれ墨の状態を変えて書いています（裏面は左右が逆になっています）。



裏面

まったく墨が通って（滲んで）いない



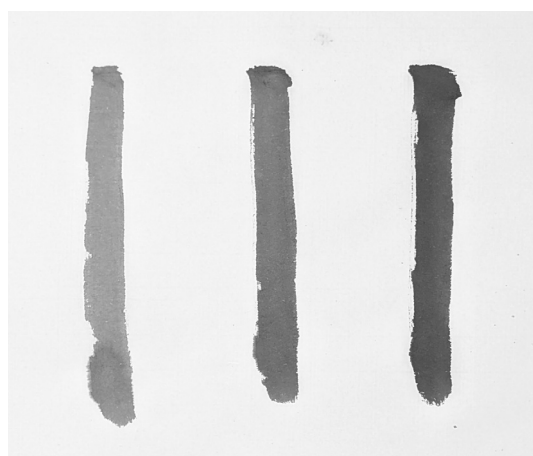
右：墨が濃いためにかすれが出る
中：薄めたため伸びがよい
左：墨色が薄くなり墨量の多い部分は少し滲んだ

①ドーサ加工紙 表面
※表面に滲み止めをした紙。全体的に白っぽい墨色になる。



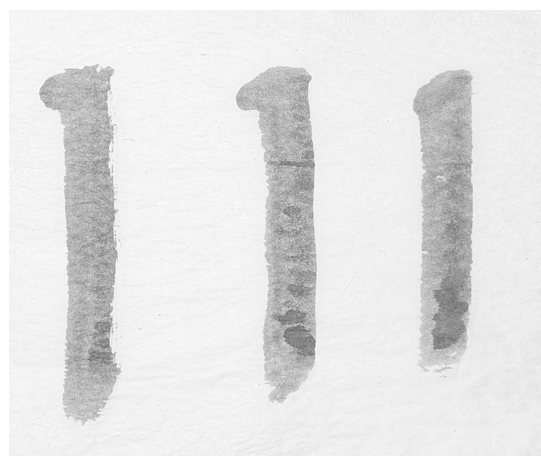
裏面

①に比べると少し墨が通っている



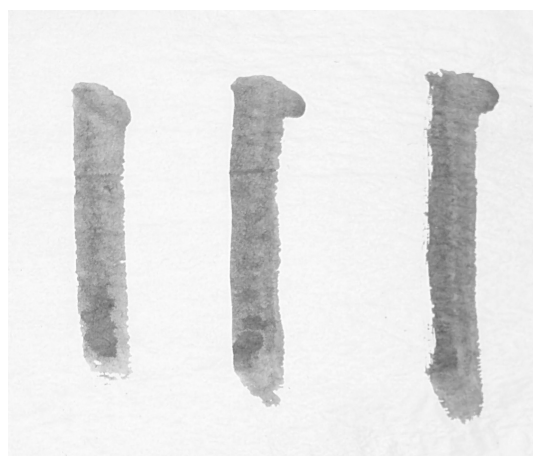
右：①同様にかすれなく滲みのない線が書けた
中：そのまま墨色が薄くなった
左：さらに墨色が薄くなった

②漉込み加工紙 表面
※製造時に滲み止めを原料に混ぜて紙漉きをした紙。「食い込み」があるので墨量が多くなった部分は少し滲みが出る。



裏面

薄いので通っているように見えるが、まったく通っていない



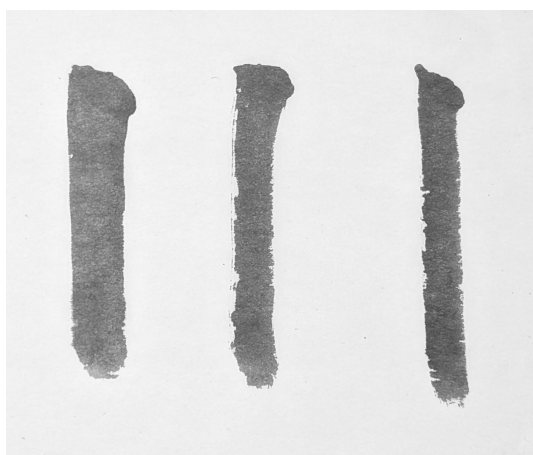
右：滑らかでかすれないが墨色がきれいに出不ない
中：墨色以外は原液と変わらず
左：さらに薄くしても墨色以外は変わらず

③雁皮紙（国産） 表面
※仮名用で有名な紙。今回は比較のために他の紙と同じ筆で書いた。表面はツルツルでまったく滲まず食い込みもほとんどないため、墨量が多いと墨だまりができる。



裏面

裏まで通っているようにも見えるが、③と同じで完全に墨が通っていない



右：①同様墨が濃く多くかすれた
中：少しかすれが出た
左：墨色が薄くなり、墨量が多いところは少し滲んだがかすれはなくなった

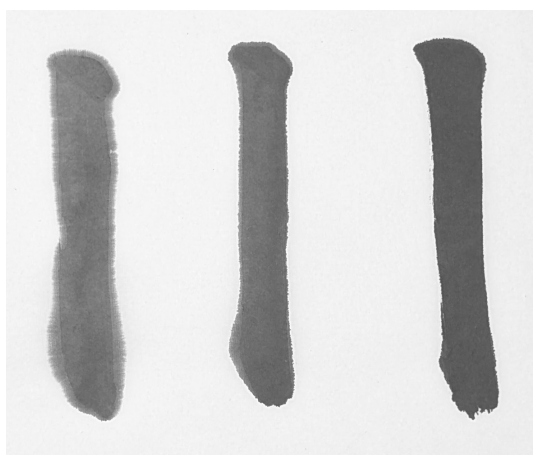
④ 楮紙（国産） 表面

※雁皮紙と同じく仮名用で有名な紙。繊維が長くザラザラした紙質である。国産の楮紙は繊維が長いのでほとんど滲まないが、外国産の楮紙は繊維が短い場合が多く、多少滲みが出る。



裏面

表と同程度に裏まで墨が通っている



右：滲みと食い込みが少しある
中：墨色が少し薄くなり滲みが出る
左：さらに墨色が薄くなり滲みが多くなった

⑤ 画仙紙（中国・安徽省産）

※薄手なので少し多めに滲みが出る漢字用画仙紙。墨色がきれいに出来る。

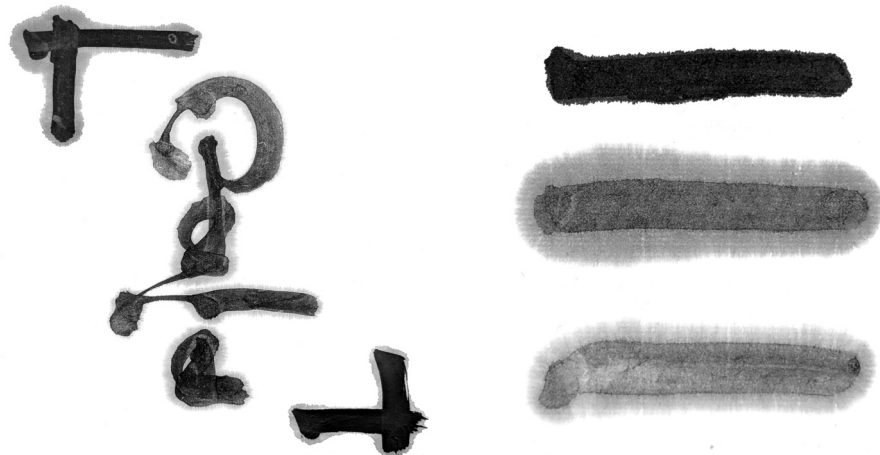
滲み止め加工の有無の見分け方として、楮紙や雁皮など元々滲みにくい原料の紙は表面が特徴的なので見分けられますが、その他の紙では書いた文字の「裏面」に注目します。加工されている紙は裏まで墨が通らないので、裏から見ると墨色が白っぽくなります。このあたりも紙選びの参考にしてみてください。

漢字を書く場合は少し食い込みのある紙をおすすめしています。隸書、楷書など滲ませたくない作品の場合は少し厚手の紙に墨を濃い目に磨って書くといでしょう。滲みが出てしまう場合は磨墨液の濃度を高くする、墨量を減らす、または筆の動きを速くするなどの工夫が必要です。滲み止めをした紙を使用することも考えられますが、墨色が出ず「立体感」を表現しにくくなるため、なるべく紙以外の部分で工夫してみてください。

行書や草書などは少し薄手の紙に普通濃度の磨墨液で書くといでしょう。多少滲みが出る程度の濃さを推奨します。中価格帯の墨であれば磨る時の伸びもよくなるので、さらに運筆がしやすくなります。また、淡墨作品で滲みを出したい場合は食い込みが多くなる薄手の紙をおすすめしたいところですが、薄くなる分破けやすいため扱いに注意が必要です。なお、墨は粒子の細かい墨を使うと滲みが広がる一方で、粒

子が粗いと広がりが少なくなります。制作する作品の表現によって墨を使い分けると一層表現の幅が広がると思います。

仮名を書く場合は滲まない加工紙に、粒子の細かい墨を使用することをおすすめしています。仮名は細い線が命のため、粒子の粗い墨で書くと、途中で字がかすれたり、途切れてしまいま



【写真3】明治～大正時代に製造された松煙墨（左）と40年ほど前の油煙墨（右）。水分量にもよるが膠成分が枯れているため独特な滲みが出る。

す。ただ、滲まない加工紙は墨が食い込まないため、粒子の細かい墨では墨色が薄くなります。墨の濃度を高めれば濃くなりますが伸びが悪くなってしまうため、松煙^{しょうえん}や鉾物性油煙^{ゆえん}など少し粒子の粗い墨を混ぜると墨色が濃くなります。また、古墨を使用する場合は膠成分^{にかわ}が枯れて粘り気がなくなっており煤^{すす}と紙の接着成分が少なくなっているため、加工紙のような食い込みのない紙に書くと、表具する際に煤が流れてしまう場合があります（写真3）。また、磨墨液に添加煤を入れた場合でも同じ現象が起こる可能性があるので注意しましょう。

なお、最近では液体墨向けの紙も販売されているようですが、その紙に磨墨液で書いても白けた墨色となり、充分に効果が発揮されません。紙を選ぶ際は液体墨、または磨墨液で書くのか、どのような書体を書くのかをよく相談されて、前述した紙の特徴を理解している用品店で購入するとよいでしょう。

■墨と筆

墨色を発揮させるためには、筆に含ませる墨量に関係します。馬毛などの毛質の硬い筆は毛が太いため含ませられる墨量が少なく、羊毛などの毛質の柔らかい筆は毛が細いため含ませられる墨量が多くなり、太く長くなるとその分墨

量を多く含むことができます。また、書き手により筆を通じて紙にかかる圧力や書く速度が異なるので、その度合いによっても微妙に墨色が異なってきます。最近では同じ銘柄の紙でも紙質が若干変わっていたり厚みが異なるので、そうした点を考慮して筆を選ぶことが大切です。

■墨の保管について

墨はよほどのことがない限り性質が悪くなることはありません。まれに湿気でカビが生えたり、エアコンやストーブで乾燥して割れてしまうことはありますが、カビは拭き取れば問題はなく、割れて細くなってしまった墨は木工用の接着剤でくっつけば差し支えありません。

なお、「墨は呼吸している」のでヒールやプラスチック容器などに密閉した状態で保管するのは避けてください。

墨以外の硯、紙や筆といった書の用具は種類がたくさんあるので自分にあったものを選ぶのは大変だと思います。先生やお仲間などに相談して、予算にあった自分の書きやすい組み合わせを見つけてください。

今回は製墨業の現状や今後の課題などについて述べたいと思います。